

# 翔

百万石蝶談会 No. 162

June 2003



## 輪島市のキタテハと黒化異常型の採集

日吉芳朗・日吉南賀子

輪島市においては近年、キタテハがほとんどみられないことを指摘しておいた(日吉, 2000; 日吉・他, 2001)。本年も、8月中頃までは採集個体は1頭にすぎず、その状態は続いているようにみえた。ところがたまたま中段町の鳳至川沿いへ出かけたところ、その河畔に群生するカナムグラの周辺に、多数のキタテハが翔び回っているのに出会った。その後、定期的におとずれ観察したところ、8~9月の個体は夏型であり、10月以降の個体は秋型であることがわかった。なお、これらの多くはノギクやソバの花で吸蜜していた。その中で、10月18日に日吉南賀子が採集した1♀は、両後翅が部分的に黒化した斑紋異常型であり、石川県下での報告例はこれまで無いと思われる。



上: 2003年10月18日に採集した異常個体♀  
下: 同時に採集した正常個体♀

2002年 4月23日	石川県輪島市大野院内	1 ♀採集	日吉芳朗
2002年 8月15日	石川県輪島市中段	2 ♂ 5 ♀採集	日吉芳朗・日吉南賀子
2002年 9月18日	石川県輪島市中段	1 ♂ 6 ♀採集	日吉芳朗
2002年10月11日	石川県輪島市中段	1 ♂ 4 ♀採集	日吉芳朗
2002年10月18日	石川県輪島市中段	1 ♂ 6 ♀採集	日吉南賀子・日吉芳朗

舳倉島でのキタテハの記録は、1968年7月21日、大野正男氏による2頭採集多数目撃へさかのぼるが(大野, 1969)、以後、追加記録はなく、筆者らが1995年から島へ通いはじめてからも一度たりとも目撃さえできなかつた。ところが本年、島の深湾洞遺跡付近の海岸で、筆者の一人に同行された波多野貴行氏が1頭を、続いて筆者も1頭を採集、1頭を目撃することができた。まさに34年ぶりのことであつた。

2002年10月5日 石川県輪島市舳倉島 2 ♀採集 1 頭目撃 波多野貴行・日吉芳朗

## 《 参考文献 》

- 日吉芳朗 (2000) 輪島市での1998年の蝶採集記録から. アカハネムシ (31): 1-5.  
 日吉芳朗・日吉南賀子 (2001) 石川県輪島市での1999年の蝶採集記録から. 翔 (149): 5-8.  
 大野正男 (1969) 舳倉島の蝶類. 蝶と蛾 (20): 57-58.

《ひよし よしろう・ひよし ながこ 〒928-0001 輪島市河井町1部64-1》

## 生け垣のエノキに付いていたゴマダラチョウ

小幡 英典

当方が住んでいる宿舎のウバメガシの生け垣に生えてきたエノキを剪定から守ってきた甲斐があり、3mを越える高さになりました。

オオムラサキの飼育をする気になった時、役に立つだろうぐらいの気持ちだったのですが、知らないうちにゴマダラチョウと思しき幼虫が付いていました。昨年、産卵されたのだと思いますが、気がつきませんでした。

この幼虫、律儀にも枝先から順に食べて、次の枝に行くので、葉のない枝ができてしまうのですが、木が大きくないので、その部分が目立ってしまい、流石に鈍い当方でも発見に至った次第です。

格好の被写体が出来て喜んでいたら、いなくなってしまうました。



日増しに大きくなる幼虫(2003年4月26日)



葉のない枝が目立ったゴマダラチョウの食べ痕(2003年4月20日 石川県金沢市米泉)

《おばた ひでのり 〒921-8044 金沢市米泉10-39-2 厚生年金宿舎105号》

## ツマグロヒョウモンの蛹期と環境からの影響

矢田 新平

2002年の秋、我が家（石川県小松市上小松町）の庭に昨年同様ツマグロヒョウモンが飛来して、園芸用スマレに産卵した。9月12日になって17頭の終齢幼虫を発見したので、この日より発育過程の観察を開始した。

### ■観察方法

17頭中無作為に採集した12頭を飼育容器に収容し、十分な食草を給与しながら室内で飼育した。残りの5頭は、そのまま野外に残存させて観察し、室内外での羽化までの発育差を比較検討することとした。

### ■結果

図-1 ツマグロヒョウモンの蛹期と環境からの影響(2002年)

No.	月 日	9月											10月		蛹期 (日)	性	蛹化時の 水平移動距離 (cm)	蛹の地上高 (cm)		
		15	16	17	18	~	24	25	26	27	28	29	30	1					2	
天候		曇	曇	雨	晴	晴	晴	曇	雨	曇	晴	雨	雨	晴						
1	屋内	← 蛹化日 羽化日 →											9	♂						
2	屋内	← 蛹化日 羽化日 →											9	♀						
3	屋内	← 蛹化日 羽化日 →											10	♂						
4	屋内	← 蛹化日 羽化日 →											10	♂						
5	屋内	← 蛹化日 羽化日 →											10	♂						
6	屋内	← 蛹化日 羽化日 →											10	♂						
7	屋内	← 蛹化日 羽化日 →											10	♂						
8	屋内	← 蛹化日 羽化日 →											11	♂						
9	屋内	← 蛹化日 羽化日 →											11	♀						
10	屋内	← 蛹化日 羽化日 →											11	♀						
11	屋内	← 蛹化日 羽化日 →											11	♀						
12	屋内	← 蛹化日 羽化日 →											11	♂						
13	屋外	← 蛹化日 羽化日 →											11	♂	50以内	77				
14	屋外	← 蛹化日 羽化日 →											11	♀	50以内	64				
15	屋外	← 蛹化日 羽化日 →											12	♀	50以内	26				
16	屋外	← 蛹化日 羽化日 →											14	?	50以内	56				
17	屋外	← 蛹化日 羽化日 →											?	?	500	25				

( ← の先は、蛹化日を示し、→ の先は、羽化日を示す )

- No16の羽化現場を見損なったため、雌雄の確認はできなかった。
- No17の蛹化場所を見失ったために蛹期間と雌雄は不明であった。後になって羽化した痕跡（抜け殻）を食草から5m離れた放置傘で発見できた。その場所は地面から25cmの高さであった。
- 17頭全て天敵には冒されず、蛹化、羽化に成功した。
- 9月下旬～10月上旬における蛹期間は、室内飼育では9～11日、野外では11～14日であり、室内飼育の方が短かった。その間、雨の降った日は9月17日、28日、10月1日であった。
- 遅く蛹化した個体ほど蛹期間が延長した。

6. 雌雄比は♂9、♀6、不明2であった。
7. No17を除く野外の幼虫4頭が蛹化した場所は、ドウダンツツジの小枝で、地面から26～77cmの高さ（平均55.8cm）であった。
8. No17を除く野外の幼虫4頭が蛹化した時の水平移動は、50cm以内であった。
9. 5頭の幼虫が発育した場所に接近してアシナガバチspの巣があったが、彼らは捕食性天敵とはならなかった。

#### ■ 考 察

1. 今回の幼虫群は、その大きさや蛹化期から、同日産卵の個体群と思われた。
2. 秋が深まるにつれ野外気温は徐々に下がり、遅く蛹化した個体ほど羽化に必要な累積温度に達する時間も延長し、蛹期間は延長した。
3. 室内飼育での蛹期間は、同時期の野外発育より2～3日短かった。その理由は、室内の方が暖かいために、羽化に必要な累積温度に達する時間が短縮できたからと思われる。
4. 野外の終齢幼虫4頭が、いっせいに蛹化した9月18日は晴れで、その前日（17日）は雨であった。また、No16が、14日間の蛹期間を経て羽化した10月2日の午後も晴れで、その日の午前中と前日（1日）は雨であった。これより、野外での変態は雨の日を避けて、天候の回復を待ってから開始する傾向にあると思われた。その理由として、雨の日（低気圧）は一般に気温が下がり、変態に必要な累積温度に達しなかったためか、それとも雨は変態に何か悪影響をもたらすのではないかと推察された。
5. 室内飼育のNo7～12において、蛹化、羽化の翌日は雨となった。雨に直接さらされなくても、何らかの感覚器官で雨（低気圧）を予知し、変態の日を選んでいるかのようであった。それとも偶然の一致か。
6. 蛹化時に移動した水平距離は、5頭中4頭が50cm以内であったことから、蛹化は幼虫がいたところから半径50cm以内で行われる確率が高いと思われた。このことについては、観察例が少ないので、今後、観察例を増やして確認したい。
7. 当地では寄生性天敵、捕食性天敵の被害は、共に観察されなかった。
8. ツマグロヒョウモンの幼虫が居たスミレが植栽されていた場所は、高さ約120～130cmのドウダンツツジも植栽されており、その北側は高さ155cmのブロックとアルミ製の扉になっていたために北風は遮られ、日当たりが良い場所だったために、とても暖かな空間といえた。

#### 《 参考文献 》

- 松井正人（2000）1999年石川県のツマグロヒョウモン概要．翔（143）：1－4.  
 奥素八子（2000）我が家の庭のツマグロヒョウモン幼虫日記．翔（143）：8－10.  
 奥素八子（2002）我が家の庭のツマグロヒョウモンに天敵出現．翔（154）：5－6.  
 嵯峨井淳郎（1999）ツマグロヒョウモンの蛹化植物について．翔（136）：18.

## 輪島市舳倉島10月のチョウ

松井正人

2002年10月12日に、輪島市舳倉島で観察したチョウを報告する。舳倉島へは、アサギマダラの飛来を期待して訪れたが、残念ながらアサギマダラは観察できなかった。

アサギマダラについては、羽咋郡押水町の宝達山頂上で、同年9月29日に4頭を観察している。宝達山の標高は637mであり、舳倉島の標高は0mなことから、この時期に多数のアサギマダラが島に飛来するのではないかと予想していた。

島へ向かう連絡船には30分前に乗り込んだが、この時期の舳倉島には多くの野鳥観察者が出入りするため、ごろ寝船室は既にいっぱいだった。しかし、土曜日だったためか、島に宿泊する人が多く、帰路の船室は空いていた。

島には、ノコンギクやツアブキが咲き乱れ、ノコンギクには、たくさんのセセリチョウが群れていた。石川県では、9月頃からチャバネセセリが割と普通に観察できるので探してみたが、すべてイチモンジセセリだった。ツアブキの花には、キタテハ、アカタテハ、ヒメアカタテハが訪れていた。

■ 2002年10月12日 石川県輪島市舳倉島 松井正人

イチモンジセセリ	30頭目撃	キタテハ	3頭目撃
ヤマトシジミ	2♂1♀目撃	アカタテハ	3頭目撃
モンキチョウ	2♂1♀目撃	ヒメアカタテハ	8頭目撃



ツアブキが咲き乱れる観音堂周辺



島のいたる所で観察した「望遠鏡の様なカメラを抱えた野鳥観察者の集団」

《まつい まさと 〒920-3121 金沢市大場町東871-15》

## 金沢市に於けるカラスシジミの記録

松井正人

石川県内のカラスシジミは、これまで白山地方の白峰村、尾口村、吉野谷村でわずかに記録されていたが、金沢市内の二カ所に於いても記録されたので報告する。

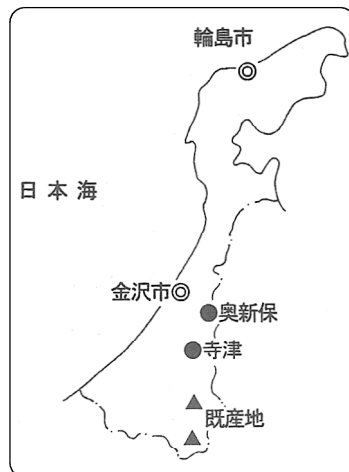
### ■カラスシジミ

2001年 7月15日	石川県金沢市奥新保	1頭	浅地哲也
2002年11月17日	石川県金沢市寺津	2卵 (オヒョウ)	松井正人・細沼 宏
2002年11月23日	石川県金沢市寺津	8卵 (オヒョウ)	松井正人

浅地哲也氏の記録は、金沢市に於ける初記録であるばかりか、既産地から遠く離れた場所での初記録であり、成虫の記録としても5頭目の記録となる。既産地周辺の調査ではなく、身近な地域の地道な調査が快挙につながったと思われる。

一方、筆者は採卵によるカラスシジミの調査を進めていたが、県内では唯一の食樹となるオヒョウを、白山地方以外に見い出せずしていた。このことを、植物観察を目的に県内を隅々まで歩いている林 二良氏にお話したところ、寺津地内の犀川溪谷にオヒョウが有ることをご教示いただいた。当地のオヒョウは、水辺から山腹にかけて分布し、車道沿いにも見られたが、卵は最も水辺に近い谷底のオヒョウから発見した。

末筆ながら、発表を委ねられた「石川むしの会」の浅地哲也氏、金沢市内のオヒョウの分布についてご教示いただいた「能登の山を歩く会」の林 二良氏、採卵調査にご同行いただいた細沼 宏氏に、お礼申し上げます。



### 《参考文献》

- 松井正人 (1996) 石川県のシジミチョウ. 翔 (123) : 4-8.  
 武藤 明 (1960) 石川県の蝶 (II). とっくりばち (9) : 4-6.  
 田中 蕃・若林守男 (1963) 加賀白山採集記. 佳香蝶 14 (52) : 90-96.

《まつい まさと 〒920-3121 金沢市大場町東871-15》

## 昆虫採集と自然保護

吉村久貴

私が小学生だった三十年ぐらい前、金沢市の奥卯辰山にはゴルフ場があった。鈴見台の団地が造成される前で、今よりずっと自然が残っていた。初夏ともなると、学校から帰宅すると、友達とカブトムシやクワガタムシを採りに行った。さまざまな昆虫と出会うこと

ができたが、美しい羽をもち種類も多い蝶に惹かれていたのは私だけだったようだ。

蝶を網で追いかけて採集しても、羽をいためずに持ち帰ることが難しく、家で飼うこともほぼ不可能であったからだと思う。そんな折、母の友人でもある「石川むしの会」の山本順子先生から、採集した蝶をいためずに三角紙に包む方法と展翅標本の作り方を教わった。

完成した傷ひとつない標本をみて、蝶を一生追いかけてみようと思ったのは、中学生になった頃であった。高校時代には、遠くへ出かけることもなく、カメラをもって写真撮影に熱中していた。現在のように、本格的にまだ見ぬ憧れの蝶・幻の蝶を求めて県外まで出かけるようになったのは大学の学生となってからである。

石川県内では、白山周辺の地域を除けば、採集禁止の地域や種はなく、「採集禁止」によって自分の採集行為に制限が加えられるという感覚を、ほとんどもっていなかった。実際、県外のどこへ行っても、国立公園の特別保護地域に入る高山帯や上高地のような場所でなければ、かなり自由に採集することができた。しかし、種指定や地域指定で採集禁止とされるものが年々増えてきた。結果として、昆虫採集というものに、いろいろな形での圧力が加えられ、採集禁止に指定されていない種までもが、以前のように自由に採集することができなくなってしまっている。

必要以上に多数の個体を採集する行為が、絶滅の原因であると思われる事例があるのも事実であるが、“絶滅の恐れがある”という理由で採集禁止に指定されている種が、リゾート開発や治山事業で生息地が破壊されることによって、その地域から絶滅したと考えさせられる場面に出会うのも事実である。確かに、少数の人間たちの乱獲で蝶を絶滅させてしまうのは許しがたいエゴイズムである。個体群の維持が難しい程度にまで個体数が減少してしまった種の「採集禁止」は当然であるが、ある種の昆虫を減少・絶滅させた原因を調査もせず、昆虫採集だけをとりあえず締め出すのは貧困な思考である。

行政の対応をみていると、採集者の採集行為だけが絶滅の原因であり、ゴルフ場の造成やリゾート開発では絶滅しないと考えているとしか思われない。いろいろな場合が想定されるが、昆虫のもつ繁殖力では、採集によって絶滅した種は皆無に近く、一般的に多くの場合、農薬や開発による生息地の破壊が絶滅の原因である。雑木林を切り開き、草原をつぶして宅地開発を行うと、幼虫の食草がなくなってしまう。母蝶が卵を産む食草がなくなれば、その地域から蝶が居なくなってしまうのは当然の結果である。食草は蝶の種によって異なるので、さまざまな植物が生えた環境が残されていることが必要となる。採集禁止という目先だけの措置に加え、それ以上の労力を使って生息地の開発自体を禁止しなければ希少昆虫は救えない。採りたい昆虫がいなくなったとき、最も悲しむのは我々採集者自身である。節度ある採集を心掛け、地域によって採集を自粛しても、いずれその地域の生息地破壊で絶滅してしまうのならば、後世のために、DNAサンプルとして絶滅前に標本をたくさん作っておいたほうがましなくらいだ。



かつて昆虫採集は自然に親しみ、自然を理解するための最良の方法として少年少女たちに推奨されていた。ところがいつの頃からか、昆虫を殺して標本にすることは単なる残酷な殺生行為とされ、罪悪であるとみなされるようになった。昆虫採集が自然保護教育に反するものとして否定された結果、異常なほどに虫を嫌う子供や、自然に全く関心のもてない子供たちが増えてしまったのが現状である。

昆虫学の進歩はアマチュアの採集に始まり、その貪欲なエネルギーによって支えられてきた。ところが、我々のように昆虫を採集する人間は自然破壊者か変質者とみなされ、マニアは金儲けのために採集を行っているように思われるようになってしまった。昆虫採集という趣味は、野山を駆け巡る健康的なスポーツであり、発見の驚きと喜びを味わえる。図鑑でしか見たことのない憧れの珍蝶を採集したときには、感動で体が震えることもある。採集されるものの種類の多さ、美しさ、珍しさ、どれをとっても非常に面白い。自然の中で自分の知的好奇心を十分満足させることができる。事実、マニアはみんな熱烈な自然愛好者ばかりである。

虫をわざわざ殺さなくても観察だけで十分だという人もいるが、かわいそうという「感情論」は問題を複雑にするだけである。自然科学に必要な観察眼や研究への情熱は採集を通して培われ、研ぎ澄まされてくる。ファミコンゲームに夢中になったり、入学試験のために解答技術を競い合ったりするよりも、子供たちは自然の中で昆虫を追い回しながら、自分で発見し、驚き、感動し、考える方がどんなにか幸せであるはずだ。

彼らは自分の疑問を解いたり、知的好奇心を満たすために、自発的に図鑑や研究書を読み、知識を深め、いつの間にか学問の面白さやすばらしさがわかるようになってくる。自然や命あるものに対する本当の愛や畏敬の念はこのような体験からしか生まれてこない。

「教育とは学問を愛する趣味を与えることだ」とルソーは言ったが、本当の教育・総合的な学習とはこういうものではないかと思う。少年時代に昆虫採集を経験した人たちの中から、多くのすぐれた科学者・医学者だけでなく文学者が生まれたのは偶然ではない。世界的にみれば、ノーベル賞を受賞した人も少なくない。

飛んでいる蝶を見ただけで、「黒い蝶と黄色い蝶が飛んでいました」だけでは観察にもならない。近似種との違いを見極めて同定したり、雌雄の判別をしたり、実際に標本にしてみないと分からないこともある。複数の標本を並べてみて初めて気づくような異常型もいる。標本を作って分類し、図鑑や文献を調べているうちに、物事を系統的に考える習慣が養われ、手先が器用になり、審美眼も研ぎ澄まされてくる。

少年時代に野外で遊ぶ時間、特に自然に触れる時間が少なくなっている現状は、少年たちの心の荒廃につながっているように思えてならない。自分が指を挟まれて痛い思いをしたクワガタムシが、ある日突然、動かなくなった体験をしたとき、小さな生命への愛が生まれてくるにちがいない。

《よしむら ひさき 〒920-0941 金沢市旭町 3-21-16》

河原で観察できる甲虫三種  
クロツヤヒゲナガコバネ  
は、五月になると鶴来では遅  
いが、白峰の河原では観察適  
期。このころ同時にマグソク  
ワガタやアイヌハンミヨウも  
観察できる。

色々な花が咲き乱れる舳倉島  
初夏のアサギマダラは、海  
岸に咲くスナビキソウやハマ  
ボツスで吸蜜するらしい。こ  
のころの舳倉島は花の島状態  
で、スナビキソウやハマボツ  
スも咲いている。日本海を北  
上するアサギマダラにとつ  
て、舳倉島は貴重な栄養補給  
基地なのかも知れない。

アカエゾゼミの採集なるか  
県内で採集されたアカエゾ  
ゼミは、二十年以上も前の一  
頭のみ。昨年、日本ゼミの会  
の林正美氏が来沢された折、  
生態や採集法を詳しく教わっ  
たので、今年は追加記録が出  
るかもしれない。何なら懸賞  
金でも付けようか。

金沢に向かっただけ池調査  
西原氏 このところ毎週  
能登まで遠征し、ため池を調  
査しながら、だんだんと金沢  
に近づいている。とは言つて  
も、東京からの通いでは、さ  
すがに疲れるようで、今しか  
できないと話していた。

能登島のヤコンオサムシを狙え  
百メートル以下の平地に広  
く分布するとされるヤコンだ  
が、平地は人為的攪乱が激し  
く、記録地は多くない。中で  
も能登の記録地は少なく、井  
村会長は、まず能登島から調  
査すると言う。

ベーツヒラタの採集に一工夫  
これまでは、たばこの煙を  
口から直接、スタジイの穴に  
吹き込んでいたが、この方法  
では、口を穴のある場所へ  
持つていかねばならず、煙も  
全て穴には入らなかつた。長  
めのチューブを用いると、何  
処の穴にも楽な姿勢で、確実  
に煙を送り込むことができる。

北海道旭川の新ギフチョウ  
気温が低いためか、生態が  
そうなのか、旭川の新ギフ  
は、本州の新ギフと違って、  
動作が緩慢。採集にネットは  
要らず、手でつまんで採る。

能登のホシミスジ調査その一  
五月一日、白いイワガサ  
の花を頼りに分布の広さを確  
認しようと思都町へ行けば、  
花期は既に終わり、県道脇の  
イワガサしか確認できなかつ  
た。花期は五月初旬だろうか。

輪島市一乗でオヒヨウを発見  
能登の外浦と佐渡の外海府  
はよく似ていると思う。外海  
府では、オヒヨウからシータ  
テハが得られているので、一  
乗のオヒヨウからもシータテ  
ハが見付かる可能性が高い。  
それにしても、オヒヨウの大  
木とアワブキの大木、何とも  
奇妙な取り合わせだった。

## 例会の記録

四月三日(木) 城南管工一

階にて八時から開催。  
ギフチョウ発生たけなわの  
為か出席は、井村、中西、山  
岸の三人と少なかった。

## 例会の記録

五月八日(木) 城南管工一  
階にて八時から開催。

南北に長い石川県、白山を  
控え昆虫の種数が多い南部の  
加賀では、調査も頻繁に行わ  
れ記録も多く残されている  
が、北部の能登は、あまり調  
査されず普通種の記録も満足  
に残されていない。能登へ出  
かける機会があれば、ちよつ  
としたことでも記録に残すよ  
うにと要望が出された。

その他の話題は、鱗翅学会  
新入会員増強キャンペーン、  
ギフチョウ一頭にネットが十  
五本、エゾヒメギフは手でつ  
まむ、広畑氏の「ほのぼの夢  
蝶館」、能登島のヤコン、ベ  
ーツヒラタの採集法、石川の  
アカエゾに懸賞金などなど。

参加は、井村、中西、富沢、  
松井、生田耕、吉村、竹谷、  
山岸の八人。

# 会員の動き・しゃばの動き

おぞいことになってしまった  
ついにゼフの若齢幼虫までもが見えなくなった。虫めがねの小さな世界で捜している、糞掃除がはかどらない。

## 環境省の生物多様性調査報告書

一九九七年と一九九八年に全国で行われた第五回調査の結果が、まとめられた。調査結果は、第四回の結果とともに、一メッシュが二万五千分の一地形図一枚に相当する二次メッシュの分布図で種別に表示されている。発行は二〇〇二年三月になっていて、手元に届いたのは、二〇〇三年四月と一年遅れ。

## ピンぼけもへっちゃら数で勝負

この春からデジカメ撮影に励んでいるT氏とS氏。昔ほど体も動かさず、眼にも自信が

なくなつた今、オートピントのデジカメは、必須アイテム。無理な姿勢も必要なく、カメラを写したい位置に置きシャッターを押すだけ。帰宅後に、大画面で良いものだけをチョイスする。

## クビキリギスのけだるい声

四月十八日の金沢は、フエーン現象で気温が上昇したまま夜を迎えた。真夏のような暑さの中、民家の庭先から何ともけだるい虫の声。今年になって初めて聞いた、クビキリギスの声だった。

## 昆虫関連団体雑誌年鑑二〇〇三

蝶類の文献目録は、一九七七年までは、白水氏によってまとめられ、それ以後から二〇〇〇年までは、白水文庫刊行会によってまとめられた。

ある。更にその後を引き継ぐ形で、二〇〇二年に発行された昆虫関連雑誌を扱った年鑑が、フタオ会から発行された。

## 連休は西表でベニボシ捜し

江崎氏、五月二日からベニボシカミキリを狙って西表に渡つた。電池式のブラスクライトも持って行ったが、何か秘策が有るのだろうか。

## 今年の季節の進み具合は

一番ギフの発生は、去年と同じだったが、その後は寒さが続き、平年より季節の進行は「やや遅」の状態。五月の連休頃には、平年の状態に追いついた様子。

## 今年も変形クロアゲハが羽化

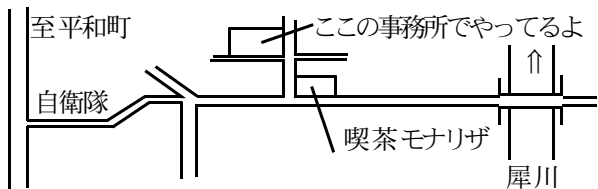
輪島のクロアゲハは、尾状突起の形が変化に富み、無尾型の記録もある。中庭のミカシに毎年クロアゲハが産卵する日吉邸では、毎年取り込んで飼育しているが、今年も尾状突起がずんぐりむつくりの個体が羽化した。

## 翔 162号

Tobu 2003年6月10日発行  
百万石蝶談会

<http://member.nifty.ne.jp/hakusan/>  
金沢市大場町東871-15 松井方  
☎920-3121 ☎076-258-2727  
郵便振替 00750-8-562  
印刷 小西紙店印刷所

例会は偶数月・5月・7月の第1木曜日8時から  
TEL参加もOKです (076-244-3318)



## 目 次 (162号)

日吉芳朗・日吉南賀子：輪島市のキタテハと黒化異常型の採集	… 1
小幡英典：生け垣のエノキに付いていたゴマダラチョウ	…………… 2
矢田新平：ツマグロヒョウモンの蛹期と環境からの影響	…………… 3
松井正人：輪島市舳倉島10月のチョウ	…………… 5
松井正人：金沢市に於けるカラスシジミの記録	…………… 6
吉村久貴：昆虫採集と自然保護	…………… 6
編 集 部：会員の動き・しゃばの動き	……………10